

ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究

松本, 圭太

<https://doi.org/10.15017/1398292>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 松本 圭太

論文題名 : ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論では、青銅器時代のユーラシア草原地帯における西から東への影響に対し、草原地帯東部を起点とした逆の動きが近年指摘されていることを踏まえ、ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の形成、変容過程そしてその要因について論じたものである。

第1章では先行研究における課題、および本論における目的、方法を明確化した。先行研究のテーマとしては、主に以下の3つが存在する。

- 1) 前2千年紀前半におけるセイマ・トルビノ青銅器群および、中国初期青銅器に関する議論
- 2) 前2千年紀後半から前1千年紀初頭、いわゆるカラスク期に関する議論
- 3) 前1千年紀初頭、いわゆる「初期遊牧民文化」の成立に関する議論

先学では、上記それぞれの段階に、西からの影響に対峙する形、あるいは単独で、青銅器文化が草原地帯東部に忽然と出現、拡散するという捉え方が主流であり、それぞれの質的な差異も不明であった。本論では個々の影響関係を、青銅器時代から鉄器時代への変化という、時間軸のより客観的な背景の下で説明することを試み、以下のような方法を採用した。

- i : 青銅器に基づく多様な文化圏の抽出と、それらの相互関係のあり方の把握 (第2~5章)
- ii : iで抽出された文化圏の内容、および相互関係の背景の解明 (第6章、終章)

第2章では、セイマ・トルビノ青銅器群についての分析を行なった。学史において、セイマ・トルビノ (後にサムシ・キジロボ) 青銅器群は、アルタイに起源し、そこから東西に拡散したとされている。この事象は、前2千年紀前半において、草原地帯東部からの強い影響を示すものとして、非常に注目されてきた。そこで本章では、この拡散モデルを検証すべく、有蓋矛、斧の型式分類、金属成分、分布から再検討を行なった。結果、セイマ・トルビノ青銅器群の型式、金属成分において、アルタイを中心とする地理勾配は認められず、ウラル山脈を挟んだ東西でやや異なる型式の分布が確認された。

第3章では、前2千年紀前半の新疆および長城地帯における初期青銅器を検討し、草原地帯の最も東においてどのように青銅器が開始されたかを具体化した。特に、初期青銅器と、同時代のユーラシア草原地帯西部、中部に広まる青銅器文化 (EAMP、セイマ・トルビノ青銅器群) の関係性の解明のため、対象地域全体の青銅器について、統合的に分析した。結果、特に EAMP との類似が認められる青銅器については、EAMP がコンプレクスとして認められる天山山脈以西、EAMP のうち単純な工具、装飾品が多く見られる新疆東部から甘粛、そして装飾品が多くを占めるオルドス以東という地域区分が認められた。つまり、当該時期の新疆、長城地帯においては、ユーラシア草原地帯西部、中部の青銅器文化が欠落的に伝達してくる様相が看取された。

第4章では前2千年紀後半 (カラスク期) の青銅器について分析している。当該期の草原地帯東部の青銅器の起源に関しては、南シベリア (ミヌシンスク) からモンゴリアへという流れを指摘す

る説と、その逆方向の影響を指摘する説という、対立する二説があった。本章では、当該期を代表する遺物である剣と刀子を、様式論的観点から分析することにより、対立する説の解消を目指した。分析の結果、以下のような様式変遷が確認された。まず前2千年紀後半にモンゴリアとミヌシンスクでそれぞれ異なる青銅器様式が成立する。前2千年紀末に両様式の相互関係の下、ミヌシンスクにおいて新たな青銅器様式が発生し、その後、新たな様式はモンゴリアに拡散して、前1千年紀初頭の対象地域全体に斉一的様式を形成した。また、有蓋斧、装飾品の検討からも、以上の様式動態に矛盾しない結果が得られた。

第5章では、いわゆる「初期遊牧民文化」出現期の様相を、直前の時期の動態と対比しつつ明らかにした。前1千年紀初頭に出現する「初期遊牧民文化」はユーラシア草原地帯全体の画期として広く使用されてきたが、その出現過程の詳細は明らかでない。本章で当該期における青銅器（剣、刀子）の様式動態を整理した結果、これらは、直前の様式における各種青銅器の系譜を引くものであるが、その内部では地域性が以前より増していることが確認できた。次に、各様式の青銅器に現れた各種動物紋を、鹿石上の動物紋と対比することで、「初期遊牧民文化」の認識で非常に重視されてきた「スキト・シベリア動物紋」の出現過程を捉えた。結果、「スキト・シベリア動物紋」は突如として現れたものではなく、直前の時期に流行した動物紋と交代する形で徐々に顕著化する様相が明らかとなった。

第6章および終章では、前章までで得られた分析結果について考察を行った。青銅器に加え、各種遺構の動態を考慮し、青銅器文化の背後に存在する、具体的な集団動態の解明と、それに基づく青銅器時代の段階区分を試みた。

結果、前2千年紀以降のユーラシア草原地帯東部においては、サヤン、アルタイ山脈を隔てた二つの地域性が通時的に認められた。また、山脈外側のミヌシンスクは内側のモンゴリアに比して一段階進んだ社会状況にあり、両地域の相互交渉によって地域全体の歴史動態が進行するという構造が存在する。このように、ユーラシア草原地帯における東方からの影響は、突如として現れたものではない。西部の影響を受けながら、草原地帯東部において独自の歴史的構造が形成されるという、一層複雑な過程の下、段階を経ながら西へ向かう流れが生み出されたと結論付けることができる。

【※2,000字程度でまとめること】

(比甲様式6)